

アシスト

市川市サッカー協会第4種委員会 委員長 石原孝幸

日本はサッカー先進国となったのか？

イビチャ・オシムさんが亡くなりました。

オシムさんが全日本の監督に就任したのは2006年7月。忘れもしない、そのひと月前のドイツワールドカップ。ジーコジャパンは決勝トーナメント進出を掛けたオーストラリア戦で逆転負けを喫し、1次リーグで敗退していた。ラスト6分からの逆転負け。あの負け方は何ともやるせなかった。多くの皆さんが私と同じように大きな喪失感とやり場のない怒りを感じておられたのでは…。

そんな時期にオシムさんは全日本の監督に就任されました。オシムさんのそれまでの、旧ユーゴスラビア代表監督の経歴やJ1ジェフユナイティッド市原・千葉での実績を考えれば、何かが変わるのではと、大きな期待を感じずにはいられませんでした。就任のニュースを聞いただけで、ひと月前の喪失感が薄れるほどでした。

オシムさんは、2003年にJ1ジェフユナイティッド市原・千葉の監督に就任し、その記者会見で「危険なチームを作る」と明言して以来、「考えて走るサッカー」を標榜し、考え判断するスピードも90分走り切る体力も要求されるオシムさんならではのトレーニングと、記者会見等での含蓄のある、時に哲学的な言葉の数々は「オシム語録」と名付けられ、大きな話題となっていました。

オシムさんが「考えて走るサッカー」を全日本に浸透させたらどんなサッカーになるのだろう、と考えただけでワクワクしました。また、就任の記者会見で何を語るかがとても楽しみでした。

「代表チームを日本化しないとイケない。」この就任会見でのオシムさんの言葉は私にとって衝撃的でした。

1993年にJリーグが開幕して漸くプロ化し、98年に夢のワールドカップに初出場。2002年は日韓共同開催。2006年はワールドカップ3大会連続出場を果たしたものの1次リーグ敗退。まだまだ、日本はサッカー後進国であり、先進国に学ばなければならないことばかりだろうという時に、「初心に帰って日本らしいサッカーをしよう」「具体的には敏捷性と積極性、そして個々の技術だ」と、日本のサッカーの良さを伸ばそうというのです。まだまだと思いつつも日本のサッカーが認められた気がしてとても嬉しかったですし、この一言で、ドイツワールドカップで味わった喪失感は吹き飛び大きな希望を抱くことができました。

実際その後のオシムジャパンは、人もボールも動くサッカーを追求し、結果が出ない時もありましたが、攻撃に転じると同時に後から後からボールを追い越す選手が現れ、あっという間に数的優位を作るサッカーは、見ていて楽しく美しいものでした。

しかし2010年の南アフリカワールドカップへ向けて、さあこれからという2007年11月。突然病に倒れられ、道半ばで後任に監督を譲られましたが、あのままオシムさんに導かれたオシムジャパンが南アフリカで躍動する姿を見てみたかったと思うのは私だけではないと思います。

たればは禁句かもしれませんが、その姿を、日本サッカーを日本化した姿を見ることができていたなら、日本サッカーの進歩のスピードはもっと早かったのではと思います。返す返すも残念でなりません。

わずか1年半の全日本の監督就任期間。ジェフの監督期間を入れてもわずか4年半の間でしたが、オシムさんは日本サッカーに多くのものを残して下さいました。

多くの指導者が「考えるサッカー」を考えました。私のようなものでさえ、考えるサッカーを子ども達に指導するにはどうしたらよいのかと考え、考えるために何を見るか、数的優位を作るためにだれが、いつ、どこに動くか考えさせる指導を心がけるようになりました。また、そのようにサッカーのことを考えることを「サッカー頭」と呼び、賢くなろうと呼びかけるようにし、今日に至っています。

さらに、オシムさんに薫陶を得たあの時のスタッフや選手が、監督やコーチとなり、次の世代の指導者となった今、日本サッカーの日本化に向けて、それぞれがそれぞれの場所で、当たり前のように動き出しているのではないかと思います、ここからさらに日本サッカーの日本化が加速するのではと期待しています。

オシムさんが日本に残してくれたすべての財産に感謝しつつ、心からご冥福をお祈り申し上げます。

さて、サッカー日本代表は、2022カタールワールドカップの出場を決め、これで連続7回出場となりました。日本がワールドカップに出場するのが夢の時代を育った者から見ると、本当に夢のような出来事です。7回連続出場を素直に喜ぶとともに、強豪ぞろいの1次リーグを何とか突破して欲しいと願っています。

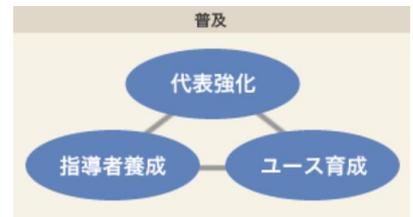
ちなみに、初出場から連続7回出場しているのはブラジルと日本だけとのこと。強豪国でも初回から連続は難しいことなのですね。そう考えると日本も、もうサッカー後進国とは言っていないのだとも思います。

連続出場するということは、次の世代が育っていることが最低条件となります。次の世代を育てる最初は4種ですから、結果として、日本の4種は最低条件の育成はうまくいっていると言えるのかもしれませんが。

では、日本はサッカー先進国となったといえるのでしょうか？

まず、サッカーの先進国というのはどういう国のことか？この定義が必要ですが、オシムさんの言葉に乗せて考えると、**その国のサッカーがその国化していたら、サッカーの先進国と言える**のではないかと思います。

日本サッカー協会は世界と対等に戦うために「三位一体+育成」の強化構想を掲げています。それまでの、①代表強化②ユース育成（若年層）③指導者育成の「三位」に、2002年以降はキッズプログラム等の取り組みやグラスルーツを大切に「育成」を加え、それぞれが一体となって取り組むことを目指そうとしています。



オシムさんは代表の日本化を唱えましたが、そこから逆算したユース育

成や指導者養成、さらに育成までが、日本サッカーの日本化という点でつながった時に、サッカーの先進国となるのだと思います。

市川市サッカー協会第4種委員会の取り組みは、「育成」に位置付けられます。子ども達が楽しめる各学年の大会やサッカー教室に加え、指導者のためのサッカー教室（指導者講習会）を毎年開催しています。今年からは、女子を対象としたサッカー教室に、行徳スワローアカデミアの協力を得て、海外で女子サッカー選手としてプレーし指導者ライセンス取得中の方や女子フットサル元日本代表の方が指導者として直接指導していただけることになり、女子の普及にもさらに力を入れていこうと思います。

私は日本中の各市レベルのサッカー協会4種委員会が、「育成」の日本化を目指していくことが必要であり、難しいことですが、各クラブが子どもにとってより良い指導を、日本人の特性にあった指導を追求しつづけることが大事なことだと思います。

現在の日本の立ち位置は、「サッカー後進国とは言っていないが、先進国とまでは言えない。」そんなところだと思います。

約30年前Jリーグが発足した頃、ワールドカップで活躍したスーパースターが多数来日し、名前の冠のついたサッカースクールが単発で数多く開催されました。今考えるとサッカースクールと呼ぶには大変お粗末なものでしたが、サッカー後進国では当たり前の光景だったと思います。その当時は私も、子ども達と同じようにスーパースターの名前だけでワクワクしたものです。

残念なのは、ワールドカップに初出場から連続7回出場し、サッカー後進国とは言っていないが、先進国とまでは言えない。今でも、日本では、他国の有名クラブの冠のついたサッカースクールがその名前だけで、もてはやされていることです。これはサッカー先進国ではあり得ないことだと思います。例えばドイツやスペインに、イギリスの有名クラブの冠のついたサッカースクールを作ったとしても見向きもされないでしょう。なぜなら、ドイツやスペインはその国のサッカーのその国化がすすんだサッカー先進国だからです。サッカー先進国は、ワールドカップの敵国のクラブが自国でスクールを開きそこに自国の子ども達が群がるとしたら、こんな屈辱的なことはない、こう考えるでしょう。みなさんはどうお考えですか？

オシムさんがお亡くなりになり、記憶にあるオシムさんの言葉を思い出し、日頃考えていることなどを話させていただきました。